

稲穂と聞くと、秋の田に黄金色の稲がたわわに実った情景を思い浮かべ、何ともいえない有難味を感じる方も多いのではないのでしょうか。

それと同時に「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲穂かな」という言葉が思い浮かびます。何方かの俳句かと思っていましたがそうではなく、五七五なので俳句成立以降に作られたことわざであり、作者も不明であるということです。

辞典によると、

～学識や徳行が深まると、その人柄や態度が謙虚になることにたとえる～

とあります。

知識や社会的地位が高まると、中には尊大な態度になる方もいますが、このことわざが生きる世の中になることを願うものです。

時代小説を読むと、近世、江戸時代の武士の給料は石^{こくだか}高、つまりお米の量によってあらわされていた事が分かります。

当時は貨幣経済が無かったわけではありません。金座や銀座など小判や硬貨を作る施設もあり、大判小判が出てくる昔話や、寛永通宝という四角い穴の開いた銭を投げる岡っ引きが活躍する物語もあります。

しかし、江戸幕府の武士は頂いた俸^{ほうろく}禄つまり、お米を現金に両替して生活をしていたのだそうです。給料がお米で支払われること、どれだけお米を大切にしていたかが分かる話ではな

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

いでしょうか。

現代においてもお米の大切さは変わりません。

そして、そのお米が取れる稲穂を、私たちは一年中、目にしています。それは五円硬貨です。

丸い穴の開いた五円玉の表面に稲穂が鮮やかに刻印されています。

普段はそこまで気にしない五円玉ですが、お寺や神社のお賽銭箱に入れ、お参りをされる際はよく「ご縁がありますように」と語呂合わせで用いられます。

わざわざお賽銭の為に五円硬貨を準備する人もおられ、その「ご縁」を大切にすることは大変ありがたいものです。稲穂に例えられた謙虚な気持ちで、仏さまとの「ご縁」を結んで頂ければと思います。

— 終 —